



甲
ホ加
617
本
2

序

と社行は字もてきや物もてきもさ
とていふもたあるは春は遊ふを
下もおもひのたれは二たもたの
あともたれはたれはたれはたれ
歌のみ文がふと仁孝波詞のけ
たのたれはたれはたれはたれ

何やんかゝるに字を尋ねる用あるは世よりあれど
誰もよれ讀味を忘る書物有りては此の位はハ
そをそ遠く遠く居るもまた他は流傳のやま
これ等のそのゆゑの友より此の書物に
久しう付志して居るは此の書物に
そがことをお理するもやうな事

天保十年三月

京 大橋長廣



活語雑話二編

はくは言葉此説ともく年あろく人々聞きし
語りもゆるまがくそことさう物に書付置る中よりその夏
あやうその三十条をあん次いてりつるハはも中より
もやもをうしやうな先しやうのまはさうハはさうきは
これ問もやせしと思ふもそのつらとの語りし人の許す
かゝらひ遣せしと否せの音信の聞え來ぬも皆りしをなれ
の趣き既小 (三十) 条
の末 もことわらう如くなう因て也然る爾後
こもかくもせん於て異かるもつりなりといへる事
來る將られうとあれハ今度それを本よ又近頃人答へる

或々ふも物の端に記しおろろかともをも其優りよりてハ雜へけく
 都てまゝち余り五行りをあん書列ひもてゆく但し去年の(三十三)標せし小
 やうて並へも見へきをむくともにしあふれいさふ(卅一)と識し
 出づてらて(五五)とゆるよひりてやうめんと次かといふハ
 天保十年といふそのむねきれつありうみうは日眞宗義門

右三(卅一) 給へき 給ひつぬ 給ふれど 給へど

左五(卅二) さうは さんむ うちりも うれやま

左六(卅三) 又をゆる斗ぞをみあへし

右八(卅四) 乃須 那須 如の意の

左十(卅五) 又ろろ ちろろ

右十(卅六) 活用五轉のすなごてのちろ

右十三(卅七) 友がみ答問

左二十(卅八) もみえん ちろろく

右廿四(卅九) ちけハやく ちけそゆされ是非

右廿五(四十) やれむをこれ類

右廿六(四一) ひぶむ ひうむろ ひうみ ひうめ

左廿七(四二) 見や也 見ゆる也此類

左廿九(四三) あうん まうぼろ 俊成卿の判し給ひし吉哥 鈴屋集ある哥の事一及

右卅一(四四) 降しる雨 ちろろ雨

左卅二(四五) あろせろ やろろ

右^{卅二} (四六) つく言をこと受るよあうひある事

右^{卅四} (四七) 數ふ數ある ひつらん ふむくり 經るばかり

右^{卅五} (四八) めり

左^{卅五} (四九) 八十一鷲の八十一情八十一所念可問の八十一の別

右^{卅八} (五十) のぞむ のぞく

左^{卅八} (五一) わらま

左^{卅十} (五二) 捧ぎ

左^{四三} (五三) さくひて

右^{四四} (五四) 詞を釈くよ安りよ延約をりてはへうとゆる事 附^四 何さゆ

左^{四五} (五五) 葦火く屋の 酢^ス 手^テ 雖^レ 有^ド

(卅一) 給へ^ミ 給ひ^ミ 給ふ^ミ 給へ^ミ

伊勢より度會ふようし此神主乃とほく觀無量壽經 和訓 貳本と題 效異

せら一とち^ハ 贈りて古への詞はうひの事をえわ考ふと

はる力を助くるはうれとこれ戴きて巻を開けえまが乃如是

我聞を翻反古經と申はある正安の帝代大御のへ書ふかく乃ま

どくわれきくぬ^ハ せら^ハ 玉い傳教大師の朱點こそは「かく

ノコトキコラハワレキ、タテヘキ」とよるれ趣きゆるを見奉り

つく思ふやうさはあの聞の字「キ、玉へキ」と訓むこくは古く

よりけこやよて傳教大師おとも然よみませるかく小本宗の三

經の訓も是らう働ひませるなうん但し「給へキ」とあるは阿

難の自小つけて乃あろけへて固よりよく聞えふれと「ふら
 心」とせらせ給へる方々かくては他はほろ多敬ひ詞ゆゑこふ
 ちあさひりかたねやうふふと々思されてりしは寫誤から
 んうとやうも思ふ玉へられとすつて四段の活き語にてらる
 るさ處を下二段の活語にていへるをさぐり覚えされとも下二段
 のつて給へといひ給ふれどかといふへき處をば四段の活き語し
 て給ひといひ給へどとやうも通ちしといへる例古くは祝詞万
 葉ころり又や降りての世の物をもをわくみえし趣き山口栞
 猶委は眞宗 且云うう如くならび 但し源氏にも然紛ハけあるはさぐりあ
 聖教和語説 云うう如くならび 然紛ハけあるはさぐりあ
 給ふ夏よりみめさか思聞え給ひと見え蜻蛉の物の悲しうんを
 思玉へれも今此もくかと思して聞ゆと見えさかといふ自につけらるなり

段活の方を用ゐるやうなれと古本より冷標のハ給ふ蜻蛉のハ給ふと云ふ
 雅言集覽より改異せる如く是等も皆々下二段の活きの方を定例のまゝつてゐる也凡
 源氏こそハくる類のなほ餘ふあつても右に推へ皆心して見へき然せし源氏あり
 ぬ物もなほ祝詞あり初めいづれ山口栞といへる如く寛狹通局をりて見
 し今此震翰の心文字にて珍明められたりなり 觀經の初なる聞を「や
 就て和語説云し事跡むけの言なり言も何れも然れとも其玉へり」玉へりの写誤
 うとし且は又思されしすは源氏の校異上といへる如きためしもあり又須六卷小
 引く世を離るへき身と思ひ給へ 却ははくある本より下二段活語から
 へき所ある二四段の活語を用ひざる也と「さうり」を思へるは亦一本に付
 給へ 却ははくありては文字かゝるハいつもの例に異なるはあつて源氏君の
 自にけの御詞故定りて下二段の活語を用ひませるこそ有るやあるは「准ある」
 彼「へり」も猶「国へき」の写誤もあるへしついで「引右須六卷ハ件り此一本に
 依らて「らん」ほともいづし「み」もあつて「事なう」給へ 却ははくある本のま
 へて「し」給へ 却ははく給へ 却ははく給へ 却ははく給へ 却ははく給へ 却ははく給へ
 けりこそ雅言集覽には並へ奉りてその八同書に「思給ふる」思給ふるの例を示して
 ハ冷標蜻蛉蓬生の三卷古本より従ひて今本の誤を云
 る「精ろ」は似すこそ思の外なる粗きあり さてついで「小山口栞」のり
 一つ事愛ふとんといふを敬ひて何々給ふと云詞より四段

と下二段との活きぬより従りて用ふ處必其けちめ乃ゆるが古今と
 互ての先此定りたるも素より也さるをこく小誦くは源氏
 空蟬卷「打とけさる人のゆりちま云云久しう見給へまほきよ
 云々とみえさるは源氏君の御こときをいへる州紙地よりの詞か
 せハ御覽せはほしき由こそ所謂他につけていへるなれを見給む
 まほしきよ」と必四段活語を用ひてゆるる處のさぬなる小給
 あるといふ下二段活語をかくつらふも不詳くはゆる一乃例よ
 と思ハ同卷よ又「これれで待給へよ」と云へるなれもあれハなり給へよといひて希
 求とゆるハ四段の活きたる例へよとよゆりてをさへていハ下二段のなる格なるをさ
 丸給へとゆるべうしき小給へよとゆれハ四段の活を
 用ふなれさ處も下二段乃をつらへりし云へきよや 又ハ誤寫もや 亦らしおしん
 ろハ右よ云
 る給へよハ四段の活を用ふべきよつて下二のをつらへるはあらうとゆるるハな
 四段の活よて用へるがからよりさるるのよと云へくも思もるれハ也さるハ四段乃

活のけせてめれぬも或ハよりをさへて希求とせざる例もこれ
 うれなき事よ非るよ異本のこくよ云るごとき趣もゆれハ也 抑己があとにつけて
 云詞よて下二段活の方かるべうしき處を四段の活きの語よて云
 る事ハ古くより後々まてもをゆりこえさる事なれと四段のふる
 及き處を下二段のよていへりとおほしきを此外よはいまこつも
 算えまらうて万十八廿ふみちぢくの小田なる山よここのありさま
 多麻敵禮よとゆるは奏せし敬福よゆ人をさうの敬ひ云へ
 き所よとせおもれぬをたまふれと 人の上よつけて云敬詞の
 定りたる四段活語と けり又 卷
 たぬしひと朝夕へ賜ふれととあるを 此ハ羅行四 段活よて必 賜ふれとと乞
 ろるへく思もる處なるを 波行下二段の 活き語よして 賜ふれととゆる也此等
 尤猶よく考へてこそさうハ云へたれふと斯く紛しきを見て

るかちよ末よ「可」といひ本よ「ハ」おろ「〇」といへる也と助けもいへ
 ばいもれぬへき致かう猶さやうよむつういへるも聞えぬ
 哥あるへしやハ抑ふ「〇」よあハせん「〇」とて「わりし斗「斗」」わりし
 の「斗」「あ」といひうらんうハ句調への自らよいく拙きうへは秋部
 よ出せふ處故これハう題ちんれとあられえうれ序なる細註ハえあ
 れぬ後の人のあはれと思えらうよかよ折「折」せる斗そよそをうへ
 き「上」いへるハルよ謂「謂」せることども也但し古今序ある細註乃趣
 むけよれよかきてよハ「何」じとそれヲ猶捨てずしてどうぬへ
 き致ひとせ伴信友り東ある那須野を馬よのりて過なるを
 こそその馬よりあは「ア」舉目「目」きてみる斗わひしる女郎花「花」も及ひ

て折もつと語りしを思出す。嵯峨野の女郎花も昔もつれ
 那須野のよおとつれ大きやうありん「ん」とおもひもやう「ん」て又古今
 よ題「題」ちんれとハ心「心」してうらりん「ん」
題しんれとく事古今集よ
 ては皆其故由のある事なりとわひ
 回せえうれ馬よりおちて「云」乃事の實「云」んことよも何じ
 ちうれども哥の才二句々其折れるをのこいへるよそよそ末の七字
 を落馬ようひて僧の身此不行儀墮著の事「ハ」おもひよ「ハ」か
 ち花の名のちやくきより此す「ん」よてかろハ彼僧正乃歌の多
 くの「ん」也と我思えら

卅四 乃須 那須如の意也

平井重民わう和語説略圖を細うりみるやう入よあとかかりらる

えりくハ形状の用言かううううやう云又^{廿ノ}白玉を手取持て見ふ

乃須田^{母ハ截断言をも連}か^母を考へませ彼^{万十四}浪^{十三丁}の^母あ

へる君^母も^母あ^母の^母用言へつける様なれと猶其用言

をけさみて「あ^母あ^母の^母君^母」と連躰言^母みてよく通暢はる

をやさん^母の^母げ^母な^母る^母よ^母は^母か^母と^母なる^母月の流る^母み^母れ^母

^{日記}の類^母そ見へくもおも^母う^母し^母と答へし事^母なるを思ひ出され^母

つぎて今思ふ^母古事記傳三卷^母一^母那洲^母ハ^母如^母く^母云^母意^母そ^母よ^母る

を同し^母こ^母か^母う^母な^母ん^母た^母如^母き^母の^母意^母と^母や^母う^母よ^母い^母ひ^母ら^母ん^母そ^母よ

ろし^母う^母へ^母き^母然^母と^母ま^母れ^母ハ^母う^母け^母な^母れ^母と^母え^母る^母時^母さ^母ハ^母な^母ん

さわく^母じ^母り^母か^母も^母い^母え^母皆^母時^母さ^母り^母躰語へ^母け^母ける^母あ^母ら^母も^母

見られぬへし^母ま^母は^母れ^母と^母う^母つ^母か^母は^母も^母ひ^母り^母なり^母或^母も^母内

まへ^母な^母け^母皆^母ま^母き^母か^母と^母ハ^母猶^母さ^母れ^母の^母い^母へ^母る^母如^母く^母み^母ま^母れ^母ハ^母通^母しか^母

きやう^母も^母思^母え^母る^母爰^母又^母ま^母さ^母と^母紙魚室主人の考へて能須那須

えも^母と^母活語^母と^母打^母り^母せて^母云^母へ^母き^母つ^母ま^母は^母ら^母と^母此^母須^母ハ^母動^母づ^母

して^母物^母を^母指^母して^母の^母詞^母と^母た^母と^母え^母其^母と^母云^母意^母と^母へ^母から^母む

をさ^母う^母と^母活^母う^母して^母吾^母足^母成^母當^母藝^母斯^母形^母か^母と^母や^母う^母も^母云^母へ^母る^母よ^母や^母と^母

云^母ひ^母か^母こ^母せ^母ら^母る^母も^母亦^母考^母ふ^母へ^母事^母也^母と^母され^母と^母哭^母兒^母如^母万十三

う^母け^母る^母正^母字^母ま^母と^母沙^母生^母十一^母廬^母鳴^母同^母六^母か^母と^母か^母ら^母を^母借^母字^母か^母ら^母へ^母き

をその借れる漢字ともいつも虚字の^母い^母つ^母と^母ふ^母え^母素^母より^母も^母活

語^母か^母ら^母う^母や^母え^母も^母や^母ら^母ん

卅五 又みる をる

コレモ御サトヨリカノ紙魚室主人ノ云オコセケルヤウ千種々や
 く久老翁の示さるく説を面りて聞けり。小みる人の今ひふ
 オトナシクスワッテ井ル方よ詞をるも人ノ丈六ラカキテ尻オ
 チツカセテ井ルといふ様かるよつふ詞也さるうう鳥のさぬをい
 へるハ皆あるといひ舟をるもつもをるも云へる例なる故考へて
 を曉せ万葉十一卷の、ミサコ井ル洲ニラル舟ノ云云の處点せりやう
 かとてしとありさやうこれより思ひ來しをこそひ活
 語雜話をみ侍るよつうて此事さう集申くれあれをみるん
 二十六卷^四 婆羅門乃作有流小田乎喫鳥臉腫而幡^{ハタカコニラリ}懂尔居とらる

結句れ居をラリと点せろを考れ鳥もをるもいふへうぬけ

うら抑此万葉此歌の居字井ル井又とやうよよみては何となく

写しうら^{古点ノ}ラリとよふんそよらへられえり此鳥がうらえ

をるをるもハいささる例の如くいへる説も暢りなる事しと思え

せられさんとの説も井ルとラるとの輕重意味の趣え雜話なるも

ひもつよおつるやうありいふトアリケルニけよさやうトイフへこ

ラハコ、ニ記シテ先ノ^{廿四}イヒサ下ノ足ハ又所ノ補ヒトス

卅六 活用五轉のすへての論

をりく人の問來る話る事を爰一条と記し置へし凡そいふ
 ゆる用言よもの其活くさまを種々變りても其用をふん敷をハ我

既くより五轉といへるをりて詞五緒ニ三轉といへるそれハさう言つて

カ 二從ひてそれニ又漢字三音考詞八衢かゝるをも考へ合せて未

然らざるを將ニ然らんハチキニ用言へてく詞ト 將然言此ニフ 連用言ハ

加へて也さて語意考えり書の原つたる所もつらめ共説 情考あり

此活語の大旨三音考三 辨論よく分せり但し少し言加ふへ

き事もあるそを先彼書小皇國ノ古言ハ五十ノ音彼此相連子活

用アリテタトヘハ言フ思フノ如キハハヒフヘト轉用シ往ク還ルノ如

キハカキクケラリルレト活ラク諸ノ言皆此格ニテ第一音アカサタナ

ハ未タ然ラサルニ用ヒ第二音イキシチニ 小方ニ然ルラ下ヘ云ヒ送ハマラワ

ニ用ヒ第三音ウクスツ又 小方ニ然ルラ云定ルニ用ヒ第四音エケセテ子

ハ然セヨト令スルニ用フ又上ニコソノ辞アルトキハ タバオ五音オコソトノ

ハ如此ナル活用ノ例ナシ又上ノ件ノ外ニモ種々ノ活用アリテ千

言萬語各皆其例格違フコトナシ活用助辞ニ因テ其義ノ細カニ

クハレク分ル、一甚妙已上 此辨論の聞えりる事

も甚妙也但し第五音ハ活用ノ例ナシといへるは粗し是 此ハ精

くも同作の玉勝間ニ來れこと活けるを奉て五十音此中ノ活語

の才五音ニ及へるをこれのみよく珍しき由を示せるはこれ

ハ三音考れ後々の翁又愈此活用の事を委らせりらんをり知

られり但し万葉ノ才五音ノ活々乎と云る詞もさき已匡ウハ保豆ヘ

祖白浪かし猶これと云れ何れも別ニ考説あり其片端ハ下(五三)の

条にて曉りも 又才四音ハ令スルニ用フといへるケセテ子ヘメレ乃七

ナるなり

乞々さものふへぐれどエエエも然る例一もわらぬ
是二此事ハ八衢精しくて願集かる早く
 手居を奉いへる 又令スルといふ造語もあらん
此よりハ活雅指南の如し 又第一音ハ未タ然ラサルニ用止といへる言通り難し曰まん往まん還らんの類ひよて①韻才一音よ活く語を押さん打さん汲まん又往まんナへカサタ ナハラレ七 こそあれ何あん何やんといふ詞を絶てかきをや
是 三はて才二音も才四音も詞よりて々所謂未と然らざる用あふ事一ゆる論めをりせり 是 四さうを一段活中二段下二段なく云ていと明くふも八衢に至てを示せるさうかす主とハ其八衢に従ひてあんその詞々々よよのつ活き様も種々なりても總て用をなれ所を將然連用截断連躰已然の五に分るれも之を五

轉と云へくさそ うめ令スル 又希求れる言といふへきとの六用 ハコ
 く夏しは思ひなりぬ 但しアれハ將字にあたる辭かと其用をなれ所五
ハ及まぬもの事ハ和語説略圖の如きれと今大
三ノ条よても粗知し 抑上引出たる三音考を辨論妙はられ少し言加ふへき事ありといひつるハ右 是二是ニ 四つは趣のあれをと思ふ故也されも亦猶鹿漏ららんハ又更に評めん人ををまひ

卅七 友鏡答問

詞乃二あやと云書を作てさる ぬつの 道に深く至れる人江戸小作り 別を示
 相場監二長昭といふ 堀近江守殿 わがかしこくを宿りあしをらぬ さやう人
 近よりられハあやとひとされ親くせをある時 又政八年正月 友鏡に付ての不審をばちと書付て示あふ其答たる様 △元問〇答 △文再問△答

△元問〇答 △文再問△答

△將然言一段のく二段のあゝ共一連用言つて將然言ハ思ハれ
 ○五轉ノヨク分ルハ八衢ニイハユル四段ノ活ニフ我友鏡五十二段ノ
 圖ノ中ニハ才四十一段ヨリ四十六段ニテノ言凡也之ニヨリテ今其
 ヨク分ルハ四段ノ活言ニ准ヘテヲ辨セントス

早	戀	散	將然
ク	シク	ラ	連用
ク	シク	リ	截斷
シ	シ	ル	連躰
キ	シキ	ル	已然
ケレ	シケレ	レ	

此(ラ)リ(ル)レヲ(カ)キ(サ)キ(キ)ナニ何レニモ一
 テニヘレ

未散先ニチラウナラバト云フヲチトハコノハ將然言ヲウ
 クル辞也然ニ寒くをくといふ思ひを或ハ戀〜くを〜と
 ひ來ませ致〜くる門ナト云へルヲ三ツへ此何とげ何〜くを

ルハ四段ノ活ニテハ(カ)(サ)(タ)(ハ)(テ)(ラ)ヲ受ルモナル疑ナキニアラ
 スヤ但し此ハ文字清チ有へしハ石塚龍磨ノ清濁考ノ説ハトラズ
 △くをハ〜ト云コノヨシニテ辨ヘラル

○意ハへノ辨様ハゲニ然レ用〜ト云へハ友鏡才五段ノ活〜ハ
 ハ才一才二段ノニテ直ニニニベキカ

△將然言四段の知ハ連用言截斷言の〜々將然言トハ思ハれ
 ○前条ニ准知スへし〜あ〜あ〜雪〜を〜なましノ類ザ
 ぞノぞハ全クル〜をナト已ニ然ルヲ受ル也トハ異ニテ未然ヲ
 受ル辞也但しコレモ此考アルガユエニカノ清濁考ナル〜ハ説ニ
 び〜聞〜ナドノぞエ濁ルハ漢籍讀ノウツリニ乞ハルハ前

クヨリ予ハ更ニ諾ハズコトニル^ルも^もばノ哥ハ一首ノウヘテ能
分レテオ一句ノズ^ズハ^ハザラ將然言ニテ用ヒオ四句ノズ^ズハ^ハ連出
言ニテ用ヒタルナリ^{ナリ}ズ^ズハ^ハ云問ニモ文^文ジノハサ^サレ^レルニテ此ハ彼
戀^戀ヒ^ヒモ^モあ^あぬ^ぬも^もノ^ノを^をナ^ナト、同ク清テアルヘキ也

△ズ^ズハ^ハバ^バズ^ズハ^ハト云コ、ロニテ

○前ノト同ク友オ五段トオ四段トニテヲミテヨト云下ホシ

△將然言 十八段より四十段まで將然言と連用言とをうねり
將然言^ハハ^ハん^んゆ^ゆふ^ふく^くて^てハ^ハさ^さら^らち^ちか^かり^りし

○此議ハケニ謂レタリサレド四段ノ活ノ如ク辞ヲ添ズレテハ更ニ
更ニ語ヲ成^成サルナルトハチガヒ幸ニ本音ノテ、ニテステニ語ヲナ

セル^ル故ニカクハ物シツル也^也ル^ル用^用ん^んカ^カむ^むカ^カま^まカ^カサ^サカナ^ナト^ト
ソヘテミンハケニ宣シカルヘシ御説ノ光リウレシク蒙リ侍リヌ
△前の説^説ト^トよ^よれ^れハ^ハん^んも^もト^トふ^ふく^くて^ても^も辨^辨へ^へら^らる

△已然言

オ三轉^三を^をき^きろ^ろ詞^詞ト^トて^て已^已然^然言^言オ^オ四^四轉^轉ハ^ハ知^知
の^のや^や何^何を^をむ^むす^すひ^ひて^て已^已然^然言^言オ^オ五^五轉^轉オ^オ知^知
の^の結^結ト^トて^て已^已然^然言^言ト^トい^いふ^ふト^トや^や知^知知^知知^知
う^うろ^ろろ^ろ故^故ト^トて^ての^のミ^ミ已^已然^然言^言ト^トや^や

○ナメケナレド略ラ好ム故ニ下問ニ直ニ界シテ愚意ヲ彰ハス初
ノ^ノハ^ハ己^己ガ^ガコ^コ、ロ^ロニア^{ニア}ラ^ラス^ス次^次ノ^ノコレ^レワ^ワガ^ガ意^意也^也コレ^レハ^ハ元^元來^來鈴^鈴
屋^屋翁^翁ノ^ノ言^言ニ^ニモ^モジ^ジラ^ラバ^バ已^已然^然ル^ルヲ^ヲ受^受ル^ル也^也將^將ニ^ニ然^然ラ^ラント^トス^スル^ルヲ^ヲ受

ル也。伝リシトノアルニ倣ヒテ設ケタル名目ナリ但シ一隅ヲ挙テ
三隅ヲシラシムルノミ也伝フハ日外對面ニ聞エシ如シ猶クハシ
クハ詞の道多クニ辨之

△此第四段ハ云云ずも躰言とある詞詞と云云ははるるちちんんのの日日

かかのの詞詞あれあれをを玉玉のの緒緒の説説室室ととそそわわゆるゆるよよせせるるものもの

ちちのの身身ははけけしし魂魂露露ももちちををななといといへへるるああももんん日日

散散らんらん後後よりよりああんんののななくくいいへへるるとと似似ししるるままとと戀戀せせどど

ううへへりりなんなんごごううけけるるこれこれももくく似似ししるる

○コハ御説ノ如クザノ躰言ニモナルトハ固ヨリ也サレバ友
鏡ニモ連用言トハ云ヘルナレサテコノザヲ將然連用截断ノ三カ

子タリト定ルコトモト如斯連用言ナルウヘニ將然言ヲモ兼タルト
ヲ明カニセスレテ此ザヲ活カシテ將然言ニスル代ハ必シ伝ヘク思
ハレタメル鈴屋ノ説ノアマレル所ヲ正シテ彼翁ノ遺意ニ從テ
道ノ爲ニセンノ意ヨリノト也ケリ抑シハズノ將然言ト執セルヨ
リ起リテツヒニハズノ將然言ナルトヲアキラメン意ツキタニナ
キニハ至レル也但シトハモトズあらんノ約リ也サルカラニ連
用截断連躰ノ三ヲ兼ルナリ將然ハ兼ズコノ処又々下問ラテテハ
十七段ノ圖ト合セテサトリ玉ヘよせ物トよらん物トノ最オ四
ク似タルトヲダニシリ玉ハしヲ將然ニアラストしずヲ將然ト
セル格リハ自ラニ明ケカルヘキ物ヲヤサテ序ニ云シよせ物

△はつとくくしつて事足ぬへんをてしつをなつさへし

○ケニ謂レタレドサラハナホ准テハ有しう聞しうヲモ削テ可ト謂ヘンナン

△六段云云らくは挙るる詞の中めりの一をめりとハ活々ねつとと圖の

中よめらんの詞省きたるハさもあふへし然らハせらん

詞つらよやけししとつ詞をあれや

○コレヲ次上ノ条ト同シ理リニテモシカク云ハ、まらうの、伝ニヨ

ハマらうんまらうき伝例ハアレハまらうのハハまらうけハハ云

ルハハナケレハ加行四段ノ活語トハ云ヘカラストマウニイハハカサ

云ハハ活サハ四種ナド伝ハハ受ニ云レヌトニナルへしうハハ

ト云ルガ未タニエ子ハトテ省ケルダニワレハサノ三快クモ思ハヌ

ナレハソレハイタカツテニサル故レハレ省キ置ツル也(ケラハ

ステニ万葉集中ニアマタニエタルヲマ一隅ヲ萃テ三隅ヲ知ラ令

ムルオモムキコ、ニ於テモ明ムヘキ也

△めりーレザリーレりーとあゆひ抄よへるりゆひなれ

えせうさうれ詞かくて事足せり

○けらひやト云ハ古書ニ巴ニアリウナトノハ活語指南ニ委

ク云ヘレハコ、ニハ略キツ

△六段すへて此六段のなりをてりの引合ありハハ

の引合なれハたりありありなるありをりり分

とつ詞をいれ何り何と云る詞をかくめりきけりき

かとも^レ^レ^レなれハ此六段ハあゆひ抄といへる也身乃なり
と^レ^レ^レのこゝて前よりいへるなりありせりも五段乃
圖ノ入へき詞からりや又六段の類ハ三轉以下のこゝて一轉二轉
えあるへくもれもれを

○コノコハ友鏡左ニステニ辨シ置ツルコ也尔ニ今ハタ御説ニヨ
リテ益ヲウルコ多クイトウレシキコニナン但シハヤクヨリノ我
コ、ロラノベバニベアオ五段ヨリ十二段テハ活用ハ實ハ一
也サレハ只一段ニ圖シテモヨキコナレルソノ詞ニ从ヒテ初学ノ
悪惑ヲ所モアルガ為ノシワサナレハ此六段ヲ又ニシテモニニ
シテモ又ニシテモヨキ也オ十七段オ廿二段ノ外ニ第十三段

十四段ヲ設ケタルモ已達ノ人ノ爲ニハ無益ノ贅言トモ云ツヘケ
レトカニカクニ初学ノ爲ニト物セルト同シ意ハへ也此ハハヤク
ヨリ思ヒラリツルコヲ答ヘキコユル也コノ處ハナホ細シク御説
ヲ聞テ返々モサダメ相ハ下ホシウナン重テ今一キサミ委ラニ
ヲノ五ヒオコセヨカシ

△四十三段ももんの詞の例い

○万葉ニ足引の山さかうつももづまゝなれと和ハりおなはあ
と^レり^レ又玉の緒ニモ四段ノ活語ト思ヒ取りケメバコソウク
ぞもみでるト云ル哥ヲ引テ例のケセテメレヨリラリル
レト活ク語凡ノそのや何ノ結ヒラ示セルタクヒノ處ニハ出

セルナメレ抑コハ万葉ニハ照字カキテアリコレハ八衢上卷 十二丁
ヨリ十
 三丁
 一ニイハユル四段ノ活ノ才四音 ㊦㊧㊨㊩
㊪㊫㊬ニハ㊭㊮㊯ト㊰㊱ト㊲ト㊳ト㊴ト㊵ト㊶ト㊷ト㊸ト㊹ト㊺ト㊻ト㊼ト㊽ト㊾ト㊿ト
 多カル例ニテぞノ結ヒニもみで知トアルハモトもみんもみ
 ちもみつもみてト活ク語ナレハ乞サルカラニもみつまで凡云へ
 ルツケモアルソカレモシ中二段ノ活ノニニカキル詞ナラハもみ
 つるまでトイハテハ語ヲナサ、ルヲ考フヘシ此外万葉集中ニ
 ハもみちヲ多行四段ノ活ニ用ヘリトホシキ猶アリ但シカ
 ク詞ノ活キニ意ツケ玉フ君スヲ珍シガリ玉フホドナレハ世ノ
 ツ子人ハ下シテ耳驚クヘシサ思ニヨリテサヤウノ語ナトヲ集
 ヘタルが山口菜ニテ此友鏡ニモソレヲ聊オトロカサテホシサ

ニワサトカク珍カナル詞ヲ舉テ△ヲツケタリ友鏡ニ△ヲ識ル
 也ルハスヘテシカ心セルナルヲ廿八段ノ右ニトキオケル如ク中ニ
 段ト四段トニ活クナルヲ世人一方ツ、ヲハナサ、シラニカ心苦ク
 テ物セルニナン更ニ々々奇ヲ好テニハアラスみづるト云詞ヲ
 挙テ○ヲシルセルコ、ロバヘコレニ同シヲト年此江門ニ参リシヲ
 リハ相模人忠胤伝ルコレモ詞ノ活キニ心イル、人ナルが友鏡ヲ
 ミテみづる伝詞ハ下二段ニコソ活ケトテトカク問ヘリシニ答
 ヘテ云ツルヲ凡アリキ今夕此もみづる伝詞ノ例ヲト問ヒ玉ヘル
 ハタ同シ類ヒニテサ心シテ三玉ヒ問玉フ人ノオハスルハイト、
 嬉シキヲ也此外ニモすくすく伝詞ヲ出テ●ヲシルセルナトス

へテ友鏡ハ聊ナル圖ヲミテオホクノ活語ヲ学得シ人モカナト
 物セルナルラ只凡ニ見過ス人ノミ多カメルハイト本意ナクナ
 ンナホワガ誤レラシ處々ハイカテ重テモノ玉ヒ示レテヨカク
贈リレ後ノ年カノ友鏡ニナシテニヲ識ルセルハワロカリキヲコソ先ハ標スヘカ
リレニト考ヘタルヲアリソレラノ義趣下ニ(五五)之ヲ云シ今ハ先年記レ贈レ儘ヲ

(廿八) もみじん まろろろ

相場ヨリ又文ソヘテ贈レル物ヲミレハ△もみじんノ答ニ再ヒイハ
 下ホシキハ万葉十四ニこもち山若鶴冠樹若の毛美都麻底欲寐ねも
吾思汝如何思此麻底立同卷十三いうほふのやさうれ
あさりかまらり行め同かひり来齋而待國め回あさり胡雀喧喧

頼ナトイヘルト同クテ何ヨリ何迄伝詞ニテ例ノ連ク格ヨリ受
 ル事々トハ意カハレリト覺ユ又八卷ノ歌ナル照ノ字ハ本つる
 トヨムヘシサルハ同万葉ニニかさろひウ香切火ナト書タルニ
 テモ知ルヘキ又万十二咲出照梅の下枝トカケルモふまて
 つる梅トヨテ、ホシキニ非スヤ此照ノ字ツ子ニヨメルテ、ニヨミ
 テささうて出てる梅ト云ヘシヤハ己しぬるトつるトラ分ニ爲ニアラ
 ハシケル圖ニよ依やつろてぬわろたひてぬややん
 ちかぬナト云ル詞ノ例ニテ著てぬ脱てぬタ勝あぬ負あぬ
 其外ニ云ヘキ詞云トシタルライフカシト云人モアリシカト
著さぬナトイヒテ詞ノ足ヌラリハきてぬトイハン方ヨシト思

ヒテサダメシ様ノコハ有レト此もみらんハ多みちんトイハ
 ニニ意モ調ベモ同シカルヘケレハ強テ四段ニ活クトサタメンハ
 タ物ムツカシキノミノヤウニソ覺ユルサテ〇みぐるハモト
 ヨリみぐるト云トハ自他ノタガヒモアリ詞ニナルコ知人ハ
 シルヘケレハ此ヲイブカレラニハ同ツタクヒニハアラジサテ又
 まろくくと云詞ノコハモト枕巻伝詞ナレハ二言合テノウヘ
 ハ用ラキサアモカハレル事モアルヘシもみち伝詞ハ紅出ト云
 詞ナリト先達ノ云ヒ置シタレハ能々味ハ、子ハワカリ巨キ
 也^上ト云オコセケルヲミテ委ニ思ヘルヤウ此文ニ驚カサレニ
 此詞ノコハ一段^キ細カニ意エヌルハテツウレシ但シもろまで

ハ猶連躰言ノツカヒサア常ノア、ニテ異アラジト思ヒソレガ類
 例トセルウヘリ來^キモ亦くヲウゴカメ詞ノヤクニツケシ者
 トソ思フサルハ來字ニアタル詞ノ活キ元タビニアラ子ハコハ
 加行四段ニろきくゆト活ク方ヨリ用ヘル也ト思ハレテ也^{來ノ}
 アタリテ意モ大盛同カレト詞ノ活キ^{字ニ}猶イハ、もみつ山ト云ル例モアル
 サアハ種々アルコ山口菜ニ詳ニセリ^是山口菜ニ云ル如ナレハつモジノツケル例^キハ
 非ル也サテ又あくるも^キハ恐ろくあらくナトラおろろ
 觸るトヤウニモ古シハ活カシ、例ニテ^此モ山口菜中^五ニイヘリ又
 コレモ路^ルヲ連躰言ト用ヒシトノ三思ハル^下五^三条ニモイハンスル趣アリ
 也此類ノコハ^ハカニカクニまろくハ必連躰言ナラテハ受ケストソ思フ
 別ニイフヘシ

サテもみ照ハ仙覺本ノテ、ヲ用ヒツ、玉緒ニハ立有佳在引キ証セ
ルナルヲワレ亦山口葉ナサテノ三用リツルナレト今此オトロカ
シニテ覺レハゲニ所引ノ万十六一 咲出照ヲ咲出てるトハヨムヘカ
ラサル、イカニモヨク考合セテアルヘキ、也コ、ニ旁ナル
説ニコレヲもみちせざるをつめてもみてる、いひ治世の約め混なれえ
トイヘルハ冠辭考和訓葉ナトニトモスレハイヘル延約ノサグメニ働ヘル
ヒガコトナラントイヘルハイハレタリスヘテ何々ハ何々ノ延タルナリ云云
ハ云云ヲ約メテイヘルモノゾト釈ケルニハソノイトヨク正キニ的レハレニ
シテ中ニハ鑿說ノエモイハヌゾ多カル五ノ条合セ考ヘテモ曉レカシ
サレハ十卷咲出照ノ照ハカノ
仙覺本ニモてるトハヨテテなるトヨメリシカレトモ八卷
一五ナル落句ヲくそりみ照トハ云テシケレハコハ照字ノ
子ノ訓ヲ借レルモノト旧印本ノ訓点者モ見テるト

ハヨメリケンサテ玉緒ニハ然五韻ノ才四音ヨリらりるれト活
ラケルハスヘテ其五韻ナルけ。せてへめれ。素四段ノ活ナル例故ニ
如此會毛美照カクツモモヲハ惑有ト。ル。ル。ナリ咲有散在ノ屬ヒニ黄有モミテノ意ニハ引証セル
ナラン然ルヲワガ又ソレアシカラシト思ヒ从ヘルハ前ノ夕ヒニ答
へし如ク彼りみつ山ナドフモジヲ躰言へツ、ケタルモサルフハ
たちつてト活ケハ乞ト考レハニテつ何互ニ証シテ知ルト云ガワガ意
ニソアナルカクテ又考ルニ亦万葉一卷十ニナル秋山乃木葉コノハ乎見而
者黄葉モミツ乎婆取而曾思奴布青アヲキ乎者置而曾歎久此等サヘ證トモ
思フハアヤシウヒガウタル意ノナシニヤ但し此黄葉仙覺本ニハモミツナ
トアレトコハモミツト読改ムル
ヲ佳シト思ヒテカクハ考ヘ合スル也其モミツトヨメルヲ佳シト心ハ次ナル青アヲキ乎婆
ニ對ヘテコハ兩ツナガラ連躰言ヲ乎婆ノ躰シテウケタルモノトミハイトヨク

トノフト オモヘハ也 サテ万十一ナル咲出照梅之下枝ヲ咲出つるトヨバヤト
ハトモウヘナレト其つるハ 旧印本ニたろトヨ 異ナルヲコノ訓サテアツ
 都ヘテ手ヲたト云類 酒ラさ酒前フをナトス 其例多カルヨリ見
 レハ猶さるニテ有ヘキ歟但シコレヲささ出てるトハヨムテシク
 サルニ准シテハカノもみ照ノヨミモヨクセズハアラジトワレ受
 ニコ、ロツケルハテタク件ノ再ビノ文獲テナルハヨロコヒキコ
 ュヘキコ也ケリテコトヤさくらくト云詞ニツキテニ言相合
 テ活キノカハルコト云云ノ來論モウヘ也但シ然ル例ハ彼さる
 みるハ一段活ナルが中二段ノトナリテむるむと
 活ラキ或ハ四段ノトナリテまみむめト活ラケル ナドニテ考ヘ
 ミレハイトゞゾヨクコ、ロエラル、ヤ 五三ノ挿ギ
 合セ考ヘシ

卅九 ゆけをゆく ゆけをゆきの是非

文政六年初テ江戸ニ出し即ニ既ク京ニテ識レルナレハ清水濱臣ヲ
 訪ヒサテソガ月次哥會ニ交リケルニ集ヘル此彼ガ語格ノコトヲ
 議リアヒツ、ソハ歌城主ニカタラハ、ヤトサ、メクヲ聞テソレハ
 ト問ヒヨリシニ小林田兵衛殿テ番町ニトイヒ歌ヨクヨミてみ
 をけコトニヨクシ玉フ君也ト教フイト、ユカ布テサテ後故ラニ
 イキケルカヒアリテ語辭ノコト言トヒ厄アアタシアヒシ中ニ今思
 ヒ出ル何人ノニカアランアルウタヨミノトアリテカナタヨ
 リゆけハゆきいあへといふトモゆき友待ク原の空の月影
 コハ能キコエタリヤトアリシニ己ゆけをゆくとアラフ、ホ、

ウハ侍ラスヤト云。シカハ爾リ然ルヲ云テモ受ケヒカ又人ノミ多キライフセキトニ思ヒ居リシヲナトアリテト、メラシシカバツヒニ夜モスカラ何クレト談リ相シハ旅忘ラル、ヨキスサニソアリシサテソノ也けをゆくとヤウニ云へキ例ノ暗記シテセルハト問ヒツシハソハアツトテ拾遺ニさけをちるさか。そ。ひ。し。山さく。云。土佐日記もめてハ。あ。れ。ハ。又。あ。る。云。伊勢物語と。そ。の。ひ。し。の。あ。ら。わ。い。さ。う。う。む。ま。さ。う。う。い。ふ。云。サノ

三ハウルサケレハト、メントアリキ ゆけハゆ。ト云へハ連用言ニ連用言ニテカ、ル。ト云へキナラハハノ拾遺ナトノ哥イッレモさけハち。う。そ。う。ち。い。は。い。び。トヤウニアルヘキ之古今ニ。て。も。い。わ。れ。で。も。い。え。り。千載ニゆけハちるぬくをみ。足引の山よりあつる瀑のち。玉。す。め。は。も。濁。れ。を。か。く。定。あ。き。此。身。や。水。を。や。も。月。の。タ。ケ。ヒ。フル。ク。ハ。万。葉。ニ。い。は。れ。り。ほ。つ。つ。い。つ。の。ま。に。あ。る。の。を。ひ。よ。玉。拾。遺。ニ。印。ナ。ト。何

レモ初メハ連用言ヲもトウケ又巳然言ヲオトウケ又本め。トヤウニ結言或ハ用言ナレハ連射ノ活キラハト受タルヲバウケテツギハイツレモ、初二句トセニ截断言シテイヒスエタリあり見えち。トヤウニ連用言ニテ云ル例ハナシサレハゆけ也。い。え。ハ。い。ふ。ト。曰。ニ。初。二。句。用。截。断。言。ニ。テ。ノ。餘。多。ノ。例。ニ。ハ。合。フ。ト。明。々。ヘ。キ。ニ

四十) やれハを。此類

我家ヨウ。り。来。る。後。遠。く。小。林。主。れ。後。撰。集。ニ。や。れ。ハ。を。や。れ。ハ。を。人。ユ。み。え。ぬ。へ。し。あ。い。も。な。は。う。の。あ。ら。わ。い。さ。う。ト。アル。哥。ナ。ト。ハ。彼。さ。け。を。ち。る。さ。う。の。ハ。さ。ひ。し。云。ノ。類。ト。同。シ。キ。ニ。似。タ。レ。ト。又。少。シ。ワ。ク。ヘ。キ。格。ニ。テ。ハ。初。メ。一。句。ニ。テ。截。テ。二。三。ノ。句。ハ。ソ。ラ。打。カ。ヘ。シ。ウ。ラ。ウ。ヘ。ニ。云。ル。ノ。ミ。ニ。テ。取。ま。は。し。ら。ぬ。ハ。り。の。數。を。ら。ぬ。ナ。ト。此。類。一。種。ア。ル。ト。也。カ。ノ。さ。け。を。ち。る。し。て。ハ。い。づ。つ。ナ。ト。一。ト。二。ト。事。物。ニ。ラ。ナ。ラ。ヘ。云。テ。辞。ノ。方。ニ。係。ル。ニ。ハ。同。カ。ラ。テ。意。ノ。方。ニ。係。ル。者

トヤ云ヘカラシカノさけハちち云云とヘモいふ云云ナトニ例シテゆ
 けえゆいといふハいふトアラハヨケンヲト評メテシタグヒハ一ニ
 物事ニナラベイヒテ三ノ句ハ別ノヲシ云トキノヲニナシ三ノ句
 一テツバクルトキハ必上ノ物事ニ言フニハツバク詞ヲ用ル格ト覺
 ユサテ又屋ささとし。村雲まよふ。夕日もまほろけふぬくさけと
 せぬ若野分トイヘル如キハささとしまよふト用言ト用言ノ連ルル
 ナレハ被句ささとしトアリテささとしトハアルトシキヲ初学モ
 自ラ知テ受ニ論モアルトシキヲナレトコ、ヲモエラヒ云カカ
 スハ妾人アルハ拘子定木ノヒガ理屈ラシモ發チモソスル
 示しおあせられしそりく此語格の字ひ一人を善く誘へん

の志の世いねんろろよおまのるがゆゑに乞
但しやれハを云云カトハ一
 ニ三とつゞけることそりれ語
 格ハなほとてばさうおといへるこ
 もりく同くは致あやう考ふへし

四一 ひうむ ひうむろ ひうみ ひうめ

歌城先生ノヒト、セ又曰レシハ詞ハ衢ト玉ハ成章ガかろしゆゆを
 ヨリヤ出ケントハオボシキモノ、詞ノハタラキニキニハモハラ
 此筋ノオヤ書トタ、ヘモシツヘキラソレガ序文ニモ跋文ニモ
 ヤカテ詞ノ活キ様ノイカニツヤ覺ユル有ルハイフカシカニス
 ヤトアリケルニワレモサル不審侍リテスナハチ彼序ニアル
 あちハへうろハせうよハせノ三ノヲ往年後鈴屋春庭ノ許へ
 ユキテハちきくニツキテノ種々ノ事質問シ侍リシ時文化
 九年コレヲモカ

タラヒシニ本居ゲニ此三トモニ本書ノ本意ニ契ハヌ^ナナルヲオホ
 ニノミ見過クシヨク正シモ改メズテ板ニエラセケルハクヤシウオ
 モヒラル^ナニナント侍リキサテソノタビ又名兒屋ニモユケリシ
 ユエニ此序ヲ書キシ有信ニモ値テ聞キツレハソレヨリ前ニカ
 ノ序カケルヲリ意得誤リタリシヨシヲ植松モ自ラ云侍リ
 キサテ右ノ外ニモ^スろむるイカ、ナレドソハ其片未タ心ツ
 カテ問ヒモセサリシヲ後ニ思ヘハコレハ後鈴屋モ其頃ハ只
 近古ノ詞ツカヒニナレウ^リテアリケントソ覺エ侍ルト聞ユ
 レハコレモ古クハ^スろみるトノミアルヤウニ思フナド評^フ
 レケルミナ謂レタル^トトノ覺エシサテ^跋文ニトノ玉ヘルハ義門

イアタ心ツカズイッ^コニヤト問ヘハ^何と^かく^りてひう^わる^こし^し
 もトイヘル處トアルヲキク、然承レハもて^ゆむるハゲニワザ
 ト^使カスル詞ナルヲ詞ツカヒノ世降ル^ニ、^ハアマシク俗ビモ
 テユクハ自然ノ^ナナルヘケレハ四段ノ活ノ方ニテ乞彼処ハ云ヘキ
 ニ似タレドモカノ跋文ヲタビニひう^むこ^もト改メミレハ又聞エ
 難ルヘシタ、斯テ露難ナシトハイビニクシナトヤウニ謂ヘクヤ
 侍ラ^シト云サシオキシ^ト也サルヲ後ノ年ニ考レハ源氏若紫
 七^瀬か^つて^なる^りてひう^みを^るト^ニエタルタグヒナホ多カリ
 サレハカノ跋文ハ何^となくひう^みも^てゆく^こも^ト有テヤヨ
 ケントハ思ヒ^ハ然ルニコハ後鈴屋ハナキカスニ入テ後ニナリシ故

跋文作者ニノ三和哥山へカタラフ文カヨハシシカハ藤垣内ヨリ
 ソノ心ツキ善シ從ハンソモ小林氏ノモトトカク曰レケシイトカシ
 コレトイフ返リコトソアリシサテトヨあろむるハ古キ物ニハト
 イフコトハ後鈴屋モ前クハ心ツカサリケメド後ニ出タル詞通
 路ヲミレハハちまこトハカハリテころろるトノミ詞ツカヒノアル
 此ハ先^{二十四}ノ条
 ニイロシコトナリ ソレヲミレハオノツカラヨク改メ定シモノナルコト
 明カ也 うさぎ 鈔あひひ鈔ヨリ云ノ一ハ我
 山口菜上卷ニイヘル如クナルヘシ

四二 見也 みる也の類

近江國へユキテカヘレル某カ來テ遊翁ト名ラ書タル短冊ヲ懷
 ヨリ出シコハヤゴトナキキハナル君ノ也トテ人ノクレタルニナ

ニ知リ玉ヘル名ニヤト問ケルヲ取見テ既クノ年江戸ニテシバ、
 コトヒシツル海野幸典主トテ名タ、ル哥ヨミノ近ハ世バナレテカ
 ウ名告ラスト聞キツルガソレナラントイラヘツ、ヨクミレハ水莖
 ノ跡イヨ、シルカリケルニナツカシク往去^イシ年ノオボユルニツキテ
 更ニ思出ルヲアルヲ今カイ付クソモ吾ワカクヨリ思ヒケラ古
 キ物ニミ也也おつ也トヤウニイヘルトみゆる也おつる也トヤウニ
 云ルトワキアルヲナルヲ拾遺春ニ春霞立る^イハ^イハ^イ玉の年
 と山より^イゆる也^イり 續詞花 信濃のやま^イけ^イけ^イ白露ハミ
 クける玉とみゆるな^イり^イ山家集 雲^イま^イ花の下^イな^イ
 逆ハ朧^イ月と^イゆる也^イり コレヲハこ也^イも也^イト有ルヘキ様

ニ思ハルソノ故ハ凡ソこゆる也なりこゆる也なりトヤウニありナ
 バ連射言ヲ受ル辞トセルハ多クハ其上ニ云ルコトヲ解釈スル
 意バヘアリ又こゆるなりこゆるありトヤウニ截断言ヲ受ルナリノ
 ありハ秋の野ノ人まのむの声をあり古今ノタゲヒイッレモ然
 ナン斯ナント物ニテレ夏ニテレ指示スコロバヘアリト思ヒナリ
 然ルニ右ニ出セル拾遺ナル續詞花ナルナドノ越る也こゆる也
 トアルハイカナラント思ヒテシニ數フレハ十七年前ナレハ癸
 未ト云シ年ノ冬江戸ニ在リケル間ニアル人ノツゲテ下谷ニ海
 野幸典君トテ語辞ノコニ深く心セサスアリト云シキハ訪ヒテ
 何ヤ吳ヤトコト語ヒ相シキコノ事ヲモカ手説タラヒシカハワレモ然

思ツルヲコハありノ上ニのモコ入レ或ハト云言ヲ加ヘテ山
 よりこゆる□ありなりおほろく月ハこゆる□ありなりトヤウニ
 レテミレハヨクキコユトイハレシハ宜之ケリケニみうける玉ト
 こゆる□ありなりナトモりのト入レテミレハヨク聞ユサテ海野
 主トハ山よりノ哥ナルハこゆる物ありなりニテモアラムカ此
 ニ似タル語勢ナカラ山のうひ棚引渡るまの雲ハ遠さささの
 こゆる□ありなりコレハ必こゆるのなりトシテニヘキ欵ト曰
 レシモウベトノ覚エシ但し今更ニ思フニコノ山のうひノナトハ
 才三句ノはモシヲウケテ玉緒々々ケイハユル解釋スル意ハヘノ
 ありなりヘウツルナレ固ヨリみゆるト云ヘキノ也凡云ヘキ欵

玉緒々々ケ
 活語指南ニ

誠ヤ潮東ニ此先生ヲ仰キツ、活語ノヤウヲモトカクサタムル徒多クサルワタリニテ
件ノ短冊ヲモカノ某ハ得タルヨシナルヲナホ聞ケルトテ語りシハ迄^{うけつ}花正
誤琴後集正誤桂園一枝正誤ナト云モノヲ
書レシヨレツタヘキクト云ヲモ聞ツトソ

(四三) まくは まくはる

遊翁先生ノ許ニテ是モ文政六年冬ナリキコレカレ集リテ四季十
首歌ヨミケルニ中ニ落花隨風ト云ル題ノアリケル下、ニフト思出テ
ワレ云出ケル我住ム小濱ノ某カ前年此題ニテ^{うりて}を^まてハ見
え^と吹風^{こま}の^や花^の心^あら^らへ^ト
此レカレ集
テ、當座ニヨメリシラア
タラツ、ケサ^アナルニ詞ノ活キノカナハ又所アリト此哥又シニ云
レ^ト侍リト云出ル即チ響ノ声ニト云タトヒノ如クニテソハマ
る^ヤトイハテ欲キ所ノコトニマト應ヘラレタルハカノおのつ^ら

り^かる^らも^も振^ハ戀^ハ身^ハ仗^もあ^けつ^へき^哉ト詠^シ哥^ヲハあ
ふ^よやく^ふの^へる^ほの^りの^ぬま^とヤウニ俊成卿ノ判シ玉ヒ
ケシムカシサヘ思ヒ合セラレテイトラカシウソオモホエシサテモ此
哥ハ腰句ノ語路ノト直チニイロテモナホナニソハトイドミテ同
シ^トナカラ春風^よ心^こま^く花^あら^らむ^さぬ^櫻も^ちや^さそ^は
あ^ん
鈴屋
集ト云ル歌ヲ評メテ此二三ノツ、キま^くは^る花^トイハテホ
シカルヘキニトイヘハ誰モ大カタ速ニ諾フヲソノ並ニハ意得難
テニシテ任^びる^や風^トイハンモ任^びる^や風^トイハンモ何レニト偏リ
云ヘクハアラシトヤウニ云人ノミ多カリケルモノヲヤサテソノ
ラリ丙支ニカノ圭ソモカ、ルサダメラセントシテモフツニ益ナキ

「ニノミイヒケツ徒ノ江戸ニモオホクテト有ケルヨリ十首ノ題ハ誰
 モヨミサシテサテ、邊世ノ哥文ノウヘニツケ或ハ古ノ例ヲ引ナト
 專ラサハ方ノコトビラコソ夜ヒト夜ヒアヒタリシカ中ニモ八衛左一文字といへどもトアル
ハムラ板下ニ設レルニヤトアリシナト 然ニ其年ハ家ニ歸シカド復シモ文政
ハウベナルノ穩カナルイハレ様ナキ 七年極月トミノ事ニテ思ヒカケズナガラ再ビカノ大城ノミモト
 ニ參リシヲ至シル即ニ値フ人々モ又ノ文政ハ正月ヨリ訪ヒ來ヌルニ
 毛詞ノ活キノ「凡」討論スル歌ヨミノ多クナリテソアリシ後ニ思
 へハ一トセニトセニサバカリ此道ノ開ケニタル「ハ全ラ此遊翁先
 生下タ上ニ云ル小林主或ハナトノ勤クヒトヲ誘ハル、ニヨリテニソアリ
 先二冊七ニ出シテ折場ケル有メノ此頃イフカリテ前波黙軒ノ哥ヲツトヘタル書ノ櫻木ニモ彫ルヲ三ル
ニソレガ跋カレタルハハ元遊翁先生ナメルヲ其文中ニ活語ノウヘニイカニソヤ

覺ユル有ハイカニト云ニツキテ其不審モイハラヌニハアラヌナレト非也抑彼ノ跋
 文ハハルカニサイツ年ノ事此主ノ活語助舞ノ「ニ深ク至ラシハ爾後」トト思ハル、ヲ又
 カノ「ナ」ト云ハ正誤ナト云書居ヲモカレタリケナレハソヲニハカノ跋文ノ如キハ自ラモ
 用ラシヌ「ナ」ト云ハ又今ハ實ニ詞ノ道ニ深ク至リテセルカニコサヲモ明メラシナシト
 ゾ思フニ種日記ト云モノ並ニ其序ニモイカニツヤ覺ユル詞、カハノアルモ同シタクヒソカニ
 彼序カ、レシ小林先生ハタ世ニカニコソ語格ヲ論セラハ、文人ナラハヤクノ年未ダコ、
 ニ至ラシテ訂正セラレサリケン彼ニ種道記中ノ佳ラヌ処ヲトリ出ナドシテトカクハナ思フトシソ
 トイラヘオケル「モアリツイデニ世ニ怠リ置ヘシワレカ、ル詩跋ドモヲ記ヌルモイカデ
 活語ヲ正クセント志シテナレドヤガテ自ラ過シナホ脱シ
 サラムソハ心ツケラン人々ヨトモカクモヨキニ引直シテヨ

四四 ふれる雨 ふる雨

江戸人ノヨシ越前福井ワタリヘ要アリテイキツルツイデニト云テ
 鐮木尚平トイフガサキヲト年天保ノ冬カヘサノ道ヲハ此小濱ヘ回
 リ來ツルハコトサラニ詞ノ活キノトカタラハン爲トゾサテ何クレ
 一言語ヘル中ニ此コロ旅宿ニテ岩ほよりまつ濡をめて山里乃垣

ねさひ〜くふれ。雨哉トアル可ヲ。ミツ此哥アハレト賞吟スヘク
 活語ノ様將エシレヌアルニハ非レ所ふれ。雨ト云ル処スコシイカニ
 ソヤ覚ユルハイカニトアリケルニサヤウトイラヘツ、スベテふ
 きるト云ヘキヲふるト云ハスベケレドあるヲふれ。トハ云ヘ
 カラ又軟ト 初編(四)ノ条ニ云ル趣ヲ イロ出レハ即拵チテ「然リヨシヤ作者ハ
 アラズ証ヒゴツ所サバ」古シヘノ例ニ下カセシニハカウデハト我思
 ツル所暗合トテイトイタウ喜ボヘリキ 章ノイテニイハシハ衛文章
 人々トアルヘキ処ナルニト評ムル人アレドサニハアズシカシ
 コハ次ナルナルレトナドニ應シテホアシカラヌホド考フヘシ

(四五) あふせる ち〜

尚平又云スヘテ詞ノ活キサ下ハ誤ラテモツカフトコロノ互キニ

適ハヌモナホ活語ニ精ナラヌ者ト云ベシ誰ガニカアラン心
 くさりのえとつふ事をトテき〜ろあるみちのく紙〜あ〜
 ち〜あ〜ゆ〜く〜猫の〜ち〜もコレハカノハ衛万二戀そ〜
 ら〜ナトラ引テ辨ヘタル条シラヌ誤リノ並ニハアフヲ
 ちしノ用ヒ処ワロク必あ〜せると云ヘキ哥ト思フトイヘリ

コレモ 先(十六)条ニイヒシ意ニ似タレハソノ趣ニテ 入紐ノトイラヘシト也

(四六) かく詞を〜受る〜あらひある事

コレモ尚平ノ云ル「ナルガ霞つく〜と思ひし春の日は朧月夜
 成に〜哉ト云ル哥モアハレニハオホユレド〜」ト云ルホ
 ト口惜カルヘキニヤトイヘリキコレモ理リニハアレトコレニハ吾

又思へルヤウアルニヨリテ凡ソ此トモジノハハヤク詞玉緒ニ
 クハレキ論メノアルトニテゲニ連ク言ヲト受ルハ總テハ
 耳カラズサレドカ、ル処ハ大カタハ^暮又ハ^暮ト云
 へキ格ナルト固ヨリ自ラヨク知レルムカシノカシコキ人ノ哥
 文ニモワサト其格ニタガヘテ物セリト覚シキモアリ亦ハ
 自ラ何トナウ然ナレトニテ^即宜キモ少カラヌ也コ
 レニ因リテコハ一偏ニモ云カタカヲニトオホラカニノ三云テワ
 カレシラ今思出タルト、ニコ、ニ云ントス水上トウヘモ云リ
 雲井より落てくるも^語瀧哉^勢鈴鹿川音よきてや世
 をはらん年ふるまゝふるまゝ^{何ニカ}あらし^{有ケン}く^{有ケン}

うりりりと思身をうりりみてる人やみるらん^{中務} 集
 まはるる志木も^{思岑}人よ^集れぬ我戀らん^コ
 レラハワロシトハ聞エズ其一ライハ、うりりみてあるハ、
 みて世を々経る事^{玉緒二卷ニ}人やみるらんノ意ニテ彼^{引テ論セル}
 源氏ナルふ^るま^るま^るひ^るる^{トヨメル哥}トヨメル哥^{ノタクヒナ}
 ラントソ思ハル、モシコレうりりみてへぬ^{ト詞へッケルナリ}或ハうりりみてふ^コ
 や人のみるらんナト云ニハ歎息ノ深キ処アラハレスシテ却
 リテヨカラヌナルヘシ何レノ哥ニテモカ、ルハ皆准ヘテ知ヘキ
 也^{此引出タル中ニ勢語ナル来るハ伊勢集ニ此哥此句落来る}サテ文ニテ
 ハ榮花初花ニ御くらちあやまけ^云おえ^{云山々}ま^云け^云

寺々の僧少しも驗し行ひず。聞しめれをそのころに
 尋ねめし集めたり。トミエ源氏桐壺ニおほしきとる。ハか
 ルれと下タタ霧ニ君も御車もへしてとあり玉ひる。人
 人申つるトミエタルナトヲ考フヘシ常例ニアラ又処ニ却リテ
 意味ハ深クコモレリ コレヲラコト、クモモ心ナキ一本アリトヤウニモ
 ムキニコ、ロウルカラるモ心ノ脱タル本ヲハ然トハ心ツカ
 マテタミサル本ヨシトノミオモヒ入タルニテモアルヘシ 但し然リトテ又
 然ツバク詞ヲト受タルハ本ヨリ拙クテノ態ナランモ多カラ
 ニハヨク簡ニ又ヘキ也古キ哥トテモ出る。も入る。も見え
 て引の山のを乃へ澄る月影 統後
 拾遺 コノいつる。もナトハイ
 カニソヤオホユトイヒテモアルヘシ又 コレモ統
 後拾遺ニ 一了る。も明る。も

きけし郭公やま深きよの月鳴也此明る。ハ夕互カラ又
 ニヤサレドコハ明る。もをときくと云意ラフクメシニテ猶コレ
 巧ナルニテモアラニ扱スヘテ此ケチメラヨク辨ヘテホシキコニ
 テ妄リニ他ノ語ツカヒラバトアリカ、リトテカロ、シウノ
 ミ評メクタスヘキモノニハ非ルヘシカノうらみつ。も。も
 ひしトヨミケンモ霞ム、暮ル、ハアレト思ヒシヨシニテイハ
 ヌル歎キノ意含ミテキコユレハ斯ルガ宜キ也ト覺ユサレト作
 者ノ意ハ然ラサルニヤハカリカタシ

(四七) かそふ かそめる ひつらん ふむり むるはうり

亦尚平又論シテ數あるハ今ハ唯下二段活キ語ト聞ユレト古ハ

四段ニモ通ヒケンサ思ハカきうそハ緒ナト様ニ射言ヘふ字ヨリ
 云ツケタル例ノ万葉ニミエテ彼まうさるう稲田姫紀ナド都テ
 今ハタ下二段一閑ユル語ニテモ昔ハ四段ナリシ例アレバト云シモ又
 堀川百首ニ引駒の蹄やひつらん逢坂の関の清水の底の濁まるト
 ミエタルハ留リノきるニ心付テ考レハオ二句ひちらんナルベウ思ハ
 ルハヒ近世人ノ哥ニ五月雨と松の千年もふる斗幾日晴ぬ住吉濱
 トヨメルハ経る降る掛タルナルヲ経るノ方ニテイハハ斗伝ツケタル
 処アカズ伝シ類大凡皆謂レタルトツ覚エシ但うさおふまハ朝もつ紀ナ
 ド都テ枕詞ハ風情ナルハ哉
断言シテ云ル例コレカト有ニ夕恒例ニテ論ルハイカト相場長昭ノ評セルゾ佳キ枕詞ハ三連用
 截断連射何レハ定言ナシ三冬つ春ノ如キハ連用言然截断多連射ニ彼名細之撰卷ニ夕名
 細守指見ニ云ル等考渡スヘキサテ又堀百ナル濁まるハ末シカ有リテモ本ナルつらん件ノ哥ニテ
 ハ尚サテヨケン欽サテ五月雨ノ哥ハ藏山集ト云ヘルニ見エタルソレニ付テ難藏山

ト云ルモノヲ小沢盧庵ノ書タメルニモ右語路ニツキテノ難ハ未タ心ツキタラサナルハ
 サ斗ノ哥ヨモ此筋ハ能モ分ケサリケレハナルヘキラ鐘木氏ハケニ能論メケリトツ覚ユル

四八 めと

尚平又語まうく越路にてひと日ある人の問て紅葉乱れてなぐる
 めりといふ詞をまらぬの約れよそかたりといふこと也といふハ可
 なりやと云し小答へてそハ名傳入の書置る物ト見えん
 れといふり心くさるまをこ也とてめりもほへて見えりこれ
 意さらる眼に見る限らぬ心きて思ひえり然からんと大方
 定むるをも云あといふ即つね俗ひ語ニ何と見ゆ吳と見えてと
 推し量るまらうたつた事ぞ示しさと云りこれもいふ日
 ひさしの初学の爲殊と感ひを解く事もろくも度るとぞ称ふ

へきひる書に汲り頼りあしめり此流るめり或ハ往り
 かどのを混じらけるなども思ハハ心くらき事そしすきて
 詞をこく何の約也くれの延る也かしのふハハみさひうそく
 のともまれば多る者也(五四) 全考中よも件の流れりといへるかをも抑
 漢籍讀ありて語を成し難き訓み様といへる趣山口栞下三十七
 云る如くかるをゆして哥をといさるるものゆるをまうは然
 雅言を釋くとして其ゆゑ詞に歸していそんまけおあまり
 なるやををこかる義也

(四九) 八十一鷺の八十一情八十一所念可聞の八十一の別

もい草くさといひ八十一鷺といへるくさ情八十一所念

可聞あといへる八十一あも同じきさばして實ハ異也この辨
 別のうゝ意得いまいと恆に會ひ相ふられうせ問試ミリるよ
 青山茂春の情八十一所念コホクハ、オモホユの八十一おもほあといひ用言へといひ
 つまねたののちろ文字半虚といふいあされるよて形状言也又
 八十一鷺れ八十一ももより鷺霍公かしく躰言躰言といふハ漢文
字ハ實字ニ云ニ當
 つゝてこの虚字と云うける用言也此虚字に當る用言ハ躰
 言へるさよりもつゝの半虚字に當る形状言もさより
 躰言へはく例万葉八卷九情具伎物にそ有るかと見え
 れるの草くさと躰といひかしく鷺と連躰の用といふ
 詞の活といへるも同く鷺のくもきと活きて用

言へこそつらん木のまたちとさあね日さし

といへるなり即知らるるも此半虚字に當る形状言と虚字に當

る用言と又実字に當る躰言のつらへも山口栞上卷下卷

廿二左廿三 右廿四 して既く意得る事いあんといへるそりいふことえ

々るたくし猶いさく八十一鶯伯勞鳥之草具吉かしのく

くしと八変いへるれぬを情八十一所念と連用いひ情具伎物と

連躰いへるくくも情具之眼具之 万十七 廿二下 かついふれえ

鳴く 鳴きれくさく善く善きのくさくの甚く異なる準

知れへし 鳴くをなほとほへんれ といへる 誰もいふ易くそ曉あんな

善くもよしと云例明し

とこそ変に議り相しう今又初学の爲にせん一ハ略圖の

現在 無

の行りと 四段の活引の行とをむうへて見よとそいふ欲しとささてま

つていふらん彼草具吉の具吉を莖たうと 奥義 抄いへるも情八十一

をくくく此約りマ 或 人 けるなしも用ひししとくハさくし

まき情八十一とくまきの活と別ある事也亦略圖 無 正 並へ

て 苦くくも正の類情くも無の類あるを考へるをいふ 明な

らんくし又事の序あれはの谷 蝶 祈年 祭詞 多尔具久 万五の 谷 潜 日六の 七丁 二十五

あそせ考へて語意もよみさるも知るべきを語意よとふすへて用

言を躰言の不定りを考るる四段活語もいつも 韻の音ある例

故今もとさしとこそいふへきと似るる具又といへるもいふと云

こころうれ 螢 樽 かつま かつま 韻の音を躰させるも何る類

こころうれ 螢 樽 かつま かつま 韻の音を躰させるも何る類

こころうれ 螢 樽 かつま かつま 韻の音を躰させるも何る類

こころうれ 螢 樽 かつま かつま 韻の音を躰させるも何る類

と云へくさそそのぐうの草々ノのノ五ノ一ノ驗ノして此も彼も漢
 字ノとノ漏ノ字ノ潛ノ字ノかノとノ當ノりノてノとノかノくノ四ノ段ノの活言也と云
 ざるやうノんノ谷蠖のぐも鳴く声よりなる名と記傳にハハれども
 今ハ谷を潛くことより名からんとするの議也抑恒會ふ
 友ノ八ノ十一ノの事試問ノ起ノるノも万葉十卷ノ三ノ二ノ春ノさノれノハ伯勞鳥
 之草具吉見ノえノいノとある具吉ノ同集四ノ五ノある情八十一ノ所念
 可聞春霞ノ云ノ又ノ五ノ春日山霞棚引情具久照月夜介ノひノとノれノんノも
 かノいノへノるノぐノとノのノあるノやノうノをノハ北邊隨筆ノ四ノ一ノ其辨論を
 るノとノそノはノりノ古事記傳ノ五ノ七ノ久伎ハ久具理ノといノふノとノあれノハ伎
 を濁るべくもノりノ記ノ万ノとノ清音字あるノとノをノつノぶノうノいノびノ
 いノとノみノてノそノをノよく考へ得ノるノまノちノとノてノの説ノかノめノとノ詞ノの條理

中々い紛々敷ノあノれノを心苦く初学の爲ノとノ思ノつノるノかノれノ事ノかノん
 五ノ十ノのぞむノのぞく
 八ノ年ノのぞくノのぞむノの異同を問へる人ノのぞくノハ大ノとノ臨
 のぞむノハ多ノと望字ノ當ノるノと思ふノいノへノし事有ノき後ノ考ノれノハノとノて
 ハ協ノたノぬノいノれノと水ノのノそノきたる何ノとやうノいノれノとそをノのぞくノとノて
 様ノ云ノろハ未ノど見ノべ山ノとノのぞむノとノ曰ノめノどノのぞくノとノハ云ノ難ノきノか
 と先ノと猶ノ分ノきノとノりノとそノ覚ノしノき躬恒集ノ秋ノの山ノのぞむノとノて
 々ノあノれノハ小倉山の紅葉も底ノさノ照ノて見ノえ渡ノるらん中務集池
 このそきたる松ノ藤ノの花ノ々ノれノ源氏帚木卷ノとノ殿ノより出
 たる泉ノのそノきノめて酒ノのむノかノ但ノし臨字ノハノいノとノ唯ノのぞくノ望

必のぞむと強^クも定め^ルくきハ字鏡ノ規又闕^クノソムと^〇
 ハ今世ノソク^クのへる^ニ當^ルるか^トて又惟^ムふへし須^ク廣^ク卷^ニ是^レ上^ニ
 リ大なる耻^ニのそむぬさ^レの世を遁^ルせ^ルん^ト云^フ云^フ云^フ如^キき^ニ
 必望^ノ字^ニハ當^ルらし又臨時^ノか^トの臨^スル^ニソムと乞^フ訓^ヘき^カを思^フふ^ニ
 臨^スル^ニのそむ^クのそむ^ク何^レも當^リ望^ハのそむ^クのこ^ト云^フき^ニや^〇
 引^ル池^ノのそき^ニ又推^本卷^ノ水^ノのそき^ニ廊^ノある^ニ出^シ
 て或書^クのそむ^クを古^ハのそ^クもい^ハし也^トい^ハる^ニ宜^クう^ニし^〇

(五) わさき

經論釋の訓讀なる造語^ニま^レ和讚諸書^レて^キを^モ等^コら^レ
 總^テ眞宗聖教中^ニかる^ニ和語^ノ限^リを^モ抜^キて^キこ^トれ^ニ請^フ
 して^キ追^テ口^ニ述^スす^ニにつ^キて^キ主^トは^キ其^ノ用^ニか^ガら^レ

か^〇てハ大^ニの世^レ爲^スも^ト和語說略圖^ノい^ハ一^ツを^モ
 ら^レせ^テ時^ニ其^ノ處^ニ斯^ク界^ニひ^テよ^クけん^ニ助^ケも^モ成^ルぬ^ル
 法順寺慧教^ノの友^ニあり^テ日^ニ來^テ曰^ク此^ノ程^ニ檀^越某^ノ新^キ
 佛舍^を安^ス々^々許^スせ^テさ^レよう^カど^ク時^ニそ^モ斯^クや^レ
 を^リ人^を招^キて^キ饗^スら^シめ^テい^ハし^テ移^ル徙^ノ習^フ
 ふ^ニあり^テい^ハる^ニ事^ニ候^ト問^ヒる^ニ此^ノを^モ渡^リ座^シと^シ
 義^ニあら^ン佛^ノ神^ノか^トの^ニ有^テ假^リれ^所ニ^在せる^ガ本^ニ
 つ御座^ニ渡^リり^テま^レを^モい^ハる^ニ元^ニて^キ就^テ盃^をめ^テや^レ
 う^レ喜^ビす^ニさ^レみ^カも^モは^レ末^ニあら^ンと^シあ^レの^ニ置^ク
 あ^レは^レあ^レが^レう^レあ^レま^レの^ニ如^クり^テさ^レあ^レせ^ト

用さしせる詞からんと其時思ひよりて「なんあうる」又さし
 思ひ回らせし「〇」も彼の略圖「去字標」してゆる行り「収む
 へき渡り」此省き言「ハ」りして「写字識せる行り」に入るへき渡
 〇此略からんさて又日本紀欽明卷六「安置小墾田家」又同冊
 屈請建邦之神ニ推古卷ニ「請僧而設齋」ある孝徳卷六
 迎佛像四軀使坐塔内ト見えたるあしを考ふ「〇」せし處所
 を移れし「〇」使坐トの意ある故「請僧」も安置を「よめ
 るがうへ」傍訓「申」と書しせるなるを「か」せし彼略圖「て
 も失字を「るる」し行りあるべきせ「写字ある行り」の「〇」轉
 したるもの「〇」べき「〇」思ふ「〇」と「〇」をける「〇」「〇」

はうづりし「〇」あるをのた「〇」解説「〇」や「〇」互し「〇」へし但し「〇」
 け渡殿渡瀬カを「〇」カ命「〇」海原カを「〇」思ふ「〇」けいあり
 大木カ廬カある如く「〇」を渡り此省き詞「〇」渡し此略「〇」
 「〇」じ「〇」又「〇」ハ件りの渡を「〇」カ「〇」へ「〇」敬ひ詞
 の「〇」ある「〇」坐字「〇」カ猶佐行四段の「〇」へ
 く「〇」請安置使坐を訓める「〇」ひし詞の佐行下二段の「〇」
 重り「〇」カ同し「〇」へ「〇」カを「〇」カの轉カせし
 「〇」カ及ぶ「〇」初め某「〇」カ「〇」カてあべし
 「〇」し「〇」を後又「〇」カかみ「〇」カ日本紀たる「〇」カ
 考「〇」カ万葉十五卷四「〇」カ國「〇」君を伊麻勢〇いつ迄「〇」

我戀居らん時の知ら無くしきたる伊麻勢イマセとて使シテ坐カあり
りるはハん渡ワタ坐カの語意總トて六件の解釈シるうとじと思シうし

(五二) やく

庭松は詞を松屋翁に請てと請ひて來しついでに「花もさね紅
葉もせねと松の枝のみどりけはさうあつし」とうナかナとよめる哥
此一二、松もひさ若菜もつるのありナるをナ後ナちしを例ナしてや
といひ出るを端ナつてやしつ詞用ナひに議ナりやもゆナるしけ
る中ナに互葉廿卷ナ六ナに父母も花もがもや草枕旅をゆくとも
佐々巳ナ互庄加牟ナとある哥の落句のやうを問てて紙捧ナげもて
此約りかどいせんを恐く用ナられざるべしと同一處なる

哥に咲出不ナ來ナらんからん來をも巳字ナして書ナし此も猶
と己の誤ナしてとてナ〇とよむをよとせんう然るに佐々己ナ互
といふ詞づうひ聞えかナるやといへるは答てけし
字様の誤ナとさかめるを同ナ心同字かぐ己受ナ祢牟八旧印本
のナコ宜ナうとめど佐々己ナ互ナとナキ此音の方ナに用へるものさみ
べしといひつ天漢巳向立而ナある十卷ナ六ナの哥をもさうで
此處の仙覺本のナコムカヒタチテ訓ナくれを是も己ナ字ナに訛ナし
いふべきをさても此等ナとナコとよめるを互ナうとぬかるへし其
故と來集をナコナツドナヒ來合をナコナアハセとやうナに云へるは
二例めしつり來向の意からんハ必ナキムカヒと訓ナひな

さそはこれをも己字(キ)うつらへる例也と云へきなり似たり然
 せられしこれ瓜來向の意と見るなりけりようぬかるへし此
 大己も己も非る已比写誤あるへきこと同卷丁二天漢射
 向居而とりたりと全く同言と聞ゆるて考ふへく已向と佐
 々己互とけ詞も文字も素別也と云へきかう簡ぶべきを簡びて
 かなはいさすへて五十音の才五音一活く語をさくおんえぬ事也へ
 こ祖ちちちの祖字(ス)の音にこそさへき類も少うぬゆきよそ
 うちとどけバ諾とハワへかう(キ)の假名一己をつらへる例をこ
 をさ覚えひむさけ己の省文かとも云へくや但し捧くをさこ
 といへらん証し今一きちち明あるをえはあやといひさうてい

てれ又の日佛足跡哥とさうれとあといえし模し置敷ひて後の
 佛とゆつりまつらん佐々義麻宇佐牟ともあれや的証とい
 へらんといひ來しを「をうし心つうけりさ」とうづあへく又曰ふ
 已向を射向とさあハせて發語のいささぐささむもさうれと万
 十八卷^四ハ夜須能河波許牟可比太知豆とも見えり此許を射
 の草書^テより誤るものうてい。とよひへきや但しさいはんもむつ
 うけをれて此許ハさうらうの已向立而の已もたなここ
 ようてそれを來とハみす從此鳴渡ろかとも同く此向也といふ
 略 解 二 从ひてあるへきまもや」と云を聞其時「その二解を今考ふせる
 方より」と云て別とぬらうて後集解をうれて義字(ク)と訓へ

さよふ此考ありされこれ捧を今の世に知行下二段の活語のと思ふより此釈ありし然らむらしハ此詞四段活ともせしあらんと考へられハさうハ類例冊八四七もゆる事故は上二答問せ趣き解りぬくそれ就て此佛足哥を釈く二ハ復り此万葉の佐々己豆を引ぬへし志うめみ証し相むらしハ捧をさぐんさぐさぐさぐげとも活らあしもれを弥心ひ合せらるる但しさぐげとあはれとの二ちれも此げのぎに人事をないうと思ふ人もらるるをハ上なる冊八五二にていふ誠や此問起し古河教典それ庭松の詞も松屋文後々集に見えたるそれ

五三 界 さうひ

拾遺古徳傳三比叡山ハ傳教大師云云各ラサカヒ三子ラカキリテ

云此サカヒハ觀經の以七宝界分齊分明の界をサカヒテしみ習へるよりこれハ即ち此結果の字に當れる詞にてサカヒカキリと

連りかめれを用言なる事明く但し珍うと思えたるも古書にも例ありや又和語説略圖に之を入れバオ二音をてと受るハ中二段一段四段の三の活に至る故

中二段	は	ひ	ひ	ふ	ふ	ふ	ふ
四段	は	ひ	ひ	ふ	ふ	ふ	ふ

の二種の中へ何れより収むべきとらん

いつそや問しも彼法順寺主也さそれ應へし趣きを要略して今ういつく九界サカひハ唯躰言しつ世人多く思ふめり和訓栞古事記傳雅言集覽をよも原用言ある心つさなるとあるをた

まら正濫鈔ニノハ彼姓の境部を坂合部とも書るを擧て釈冊七

考こも此意してさへきつひさなるも少くも誠やれ
 まゝも帚木卷こ「かゝおそまゝ」つろつろかど此も形状
 言こくまゝくしきまゝ働くまゝハ相同しけれ詞の意義ハ
 あさまし〜ハもつろ異なるをやくか〜ようろま〜ハミ
 の延ひる也を〜秋くハ〜詞の活きの筋の正びへ〜正さ
 ていたゆる安り〜詞の延約をのこ云うて用ぐ〜但し〜行四
 段活語をさあさむ〜此あさま〜を考へ合せて語意〜
 へき由ハあさ〜びさ〜其も互に延約をり〜云へさ〜ハ非也
 (五五) 葺火く屋の酔スハタレド四手雖有スレテアレド
 拾遺集戀部ニ難波入り火くやれ〜たれどおのりつるこそ

こあつ〜たれト三エ堀川百首ニす〜たれ宿云同ニ即ニ〜
 ぬへしトアルナトヲ例し相ヒテハ衢ニ羅行四段ノ活キト出セリ友
 鏡ノレニ従へルガウヘニ〜ヲ識セルハサテハ唯羅行四段ニノ活
 クニ限ルトセルニ似テ不可ナリキ抑コノ詞ハ堀百一本〜たれ
 宿トアルニヨレハ下二段活ナルヨシハ衢ニミユゲニ然ル〜ハコハニ
 按スルニ此す〜ハ詞ハモト凝烟ト云言ニ垂クルト云用言ツツケ
 テ云ルニテ其垂ハモト四段ト下二段トニ活クガ故ニ〜
 ろや〜氏す〜や〜氏イハルハニテ堀百ノ二本氏ニ由ナキ誤ニ
 ハアラジ但し拾遺ノ哥ハ本万葉十一卷ニ難波人葺火燎屋之
 酔四手雖有己妻許増常目頼次吉トアナルヲ此酔四手雖有〜し

てられしと訓テはびり約リカト云古事記傳 十四ノ六四 釋ニ依テ猶考
 ルニ酢スレ四ハモトす。んすし。すび。すせ。ト佐行四段ニ活ク語ナルハシ
 サレハ凝烟始煤ヲモすしト乞云ヘキニ似タレド此ハカノ樽タケ螢スズメ谷
 蟻アリヲトオ三音ヲ躰ニ云ルモ希ニハアル類ニリアラサテ其は
 ウ垂ルト云活語シテ用ヘハ上ニ云ル如ク羅行ノ四段ノ下二段トノ活語ナレ
 ドナクハモト佐行四段ノ活キト覺シキカラハ万葉ノ酢四手雖有
 ハナホすし。ん。ニ填テタルナルヘク思ハル然レハすし。ん。ハ
 トヨムキハ。ん。ハ而有ニテ此レハ截ル、ラリハ也又ナ、ん。レ
 〇トヨメハ其レハ截ル、トキリニアラズ。ニヨク別チ三ヘシサテ
 立カヘリテ云ン此難波人ノ哥ノ留リヲ拾遺ニあれトセルハ腰

句ノ許曾ニ應セン爲ナラメト万葉ニハ次キ吉トアリテ然結フモ
 古ノ一榕アテ夕例アル玉緒七ニ 見エタル也サテ又断リテニ記傳十四ノ 六十四ニミ
 ほ。物ノ垂る々多流。多流々々物を他より垂ら。びる。云
 取トアルヨリ見レバ堀百ノす。たれる宿。ふ。云ハ始煤
 意トアラニ垂有ナルヘケレハ一本ノ。トアル方ハ空ラジト思
 ノ自ラニ垂有ナルヘケレハ一本ノ。トアル方ハ空ラジト思
 ハルレト又思ニ此詞ハカノ分。ト分。トノ彙ヒニテ乃チ鶏けの
 り。尾を。尾ナト何レニモイハレヌヘキニ准フレハたるト。トノ
 二。モ。カノ入るト入るト割るト。トナトノ如ク自然ト
 使然トキハヤカニ分ル、詞ニハ非ル欵サテコレモ序ニ云ン記傳右ノ
 處ノ云様他より令垂トアルハモト中ラズ記傳ニ然云ルハカノ

くれこめて春の行へも云古袖云くれてをれもぬれぬ云編云へル
 ヤウナルノ、一ナラムヲソハ詞通路ニ物を然ゆる言ト云へルニ
 収ムヘキニサテ其物ヲシカスルハ云也物ノ自ラ然ルハ云也
 トワカル、モ猶或ハ物ニヨリ事ニヨリテ通ヒモスト云ヘキ飲カ
 ノ明云入る云明く入る初編①条云ウモ合セ考フヘシ

天保十年庚子八月刊成



